

藩主は、どのような暮らしをしていたのでしょうか



藩主は、どのような一日を過ごしていたのでしょうか。12代徳川齊荘の側に仕えた家臣が残した日記をもとに見てみましょう。

城内での私的な生活は、二之丸御殿の中の「奥」と呼ばれた場所の建物で行われました。一方、藩主としての仕事は「表」と呼ばれた場所で行われました。つまり、毎日、「奥」から「表」へ移って仕事を行い、仕事が終わると「奥」へ帰るという生活でした。

それでは、朝起きてから夜寝るまでの一日のおおまかな日課を見てみましょう。

【朝起きてから】

朝、午前7時に「御寝之間」で起床

藩主の食事を見てみましょう。

記録にある正月元旦の献立には、次のような品が書かれていました。

御本膳として、鱈、焼鳥雑子、御汁、田作り五段盛、開キ、蒲鉾、御食二の膳として、塩引鮭、貝盛塩鮑、味噌御汁、酒浸塩鯛

三の膳として、鯉の刺身、すまし御汁、海老船盛

御引次として、素麺、盛付雑煮

豪華な食事で新年を祝ったのですね。

ほかにも、正月七日には、「七種御雑煮」、

三月三日には、「菱形草御餅」、五月五日には、

「粽五本」など、季節の行事に合わせた

献立を楽しんでいたようです。

『尾張の殿様物語』（徳川美術館 発行）より



祝膳復元(名古屋城総合事務所 蔵)

します。その後、うがい洗顔をすますと、御髪番と呼ばれる人が髪を結び、朝食をとります。

【先祖の位牌を拜む】

朝食後、御錠口が開かれ「表」に出ると、着替えを済ませて、「御祠堂」へ行き、先祖の位牌に向かって焼香し、おまいりをしました。これは、一日の最初の行事で毎日欠かさず行われました。

【朝の挨拶を行う】

次に、「例朝御目見」といって、側近の家臣たちと朝の挨拶を行いました。時には、「年寄(家老)」衆が加わり、この時は、藩主から重要なことが伝えられることもありました。

藩主が普段会うのは、「年寄」や「用人」といった重役クラスの家臣のみで、一般の家臣と会うことはほとんどありませんでした。

【藩主の仕事】

朝の朝の仕事を済ませた後、藩主には、様々な仕事がありました。その一つが家臣たちとの謁見(御目見)です。

月の内の一日、十五日、二十八日の三日間だけは、一般の家臣も藩主に会うことができる「月次御礼」という儀式がありました。江戸時代は格式(身分)が重んじられていましたので、格式に応じた形で行われていました。

御目見は、まず「中御座之間」で御年寄衆と行います。その後、「焼火之間」で御年寄列の人々や初出仕の家臣と行い、その他の家臣とは、「夜詰之間(夜居之間)」で行いました。

格式の低い家臣は、藩主が移動するときの通りがかりに御目見を行っていたそうです。

正月以外の毎月十二日には、「月次講釈」といって、「夜詰之間」で儒者(儒学の学者)から「論語」などの講義を受けました。

別の日には、「桜之間」で能役者から舞の稽古を受ける「御仕舞御稽古」という日課もありました。

また、矢場や馬場御殿で家臣たちの剣術・槍術・弓術・馬術などの視察を行うこともありました。

その他にも、領内の事情を把握するために、木曾山々の御園材の説明を受けたり、城内の武具の管理を視察したりしました。天守・小天守・御具足多門・御槍多門・御旗多門・東弓矢多門・西弓矢多門・大筒多門など3時間ほどかけて城内を視察したという記録も残っています。



名古屋城二之丸御殿復元
1840年(天保11)
復元:三浦正幸
作画:藤田正純